

ルールの境界を越える



取材・文／松井大助
撮影／西山俊哉

多様な人の声を聴きながら、自分たちでルールを更新する経験を。
それが人生を、社会を、誰もが自分で創るための礎になる

校

則の見直しのように、高校生がルールの境界を越えることの意義は二つあると考えています。一つは、秩序に従うだけでなく、「人生は自分で決められる」という感覚を取り戻せることです。「自己決定」は所得や学歴以上に幸福感に影響するという研究もあります。もう一つは、自分の意見や行動により周囲が変わることで「社会と自分はずながつている」と実感し、「社会参画」の意欲も高まることです。

現状はどうでしょう。世界価値観調査(※1)で若者に「人生を自由に決められる程度」を10段階で尋ねると、例えば、トップのスウェーデンは10と答えた人が20%、7〜9も多く、日本は10の回答が6・8%、5〜7が主流でした。若者の選挙の投票率は、スウェー

デンが8割超、日本は3割程度。私は、この差が生じる背景を知りたくて、2012年から約3年間、スウェーデンに留学し、現地で生活し、若者支援の現場や学校などを訪問するなかで、研究してきました。その経験を基に、高校生がルールの境界を越えるうえで重要だと思う点を挙げさせていただきます。

①生徒が学校を「越境」する

スウェーデンの若者は、学校とは異なる余暇の時間に、若者団体やユースセンター(※2)で活動します。これらの活動は地域ベースで、他校の生徒や地域の大人との交流が自然に生まれます。結果的に学校を越境し、よその世界で学校にはない見方を学び、社会にも参画することになります。

②生徒の声を聴き、対等に関わる

普段から「どうしたい?」と生徒の

声を聴きます。スウェーデンの学校では、給食、設備、時間割などにも生徒が意見を出す機会があります。その議論に最後まで生徒に主体的に参加してほしいなら、「対等に関わり、一緒に決める」のが、原則です。先生の想定する着地点に導こうとすると、生徒は察して、萎えるか、忖度を始め、活動も「こなす」だけになるでしょう。

③「民主的か」も生徒と対話する

生徒の主体性を高めた先に、我々は何を目指すのでしょうか。ここが曖昧だと、生徒の活動は主体的でも独善的になる可能性があります。スウェーデンの教育では、目指すのは民主主義を根づかせることだと明言しています。民主的とは何かというと、現地の19歳の若者はこう語ってくれました。「あらゆる人が自分の声を届かせることが

Navigator

独立行政法人
国立青少年教育振興機構
青少年教育研究センター 研究員

両角達平

でき、影響を与えられることだ」と。性別、性自認・性表現、民族・人種、宗教ほか思想信条、障害、年齢などで参画が妨げられない。仮に生徒が多様な人の声を反映せず、非民主的に物事を進めていたら、先生は開かれた民主的な対話によって向き合います。今の取組は「主体的か」「民主的か」。この2軸を大事にしてこそ、生徒も先生も、既存のルールの境界を越えて、より良い学校や社会を共に創造していけるのではないのでしょうか。

もろずみ・たつへい ● 1988年生まれ。大学在学中より若者の社会参画の研究および支援活動を行い、2012年よりスウェーデンのストックホルム大学に留学。ドイツの若者政策国際NGOの勤務、大学院修士課程修了を経て、現職。著書に『若者からはじまる民主主義』(明文社)。

※1 世界価値観調査 WAVE 6 2010-2014

※2 ユースセンターは、地域に設置されたユース世代(中高生世代)がさまざまな活動ができる施設